

第4章

委員座談会

第4章 委員座談会



【実施日】 令和6年12月7日（土） 【場 所】 八汐荘（小会議室）

【出席者】

学術研究連絡会委員 萩尾 俊章 沖縄民俗学会 会長
久万田 晋 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所 教授
神谷 武史 沖縄県立芸術大学音楽学部音楽文化専攻沖縄文化コース 講師
萩原 左人 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 教授
神谷 智昭 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 准教授

学術研究連絡会アドバイザー
久保田 裕道 東京文化財研究所無形文化遺産部無形民俗文化財研究室長

今回の報告書作成にあたり協力頂いた委員に座談会として集まって頂き、以下の2つのテーマに沿って自由に意見を交わして頂いた。

【座談会テーマ】

- ① 調査を終えての感想や気づきについて
- ② ムラ行事を継承していく上での課題や対応策または希望について

神谷（武）【座長】

おはようございます。ざっくばらんに色々な意見をお聞かせいただければ、非常に有意義な座談会になると思います。よろしくお祈りします。

初めに、今回の調査を振り返ってのご意見やご感想を伺いたいと思いますが、まずは委員長である萩尾先生からお願いします。

【座談会テーマ①】

調査を終えての感想や気づきについて

萩尾

今回の事業を振り返りますと、令和3年11月29日に第1回目の会議が開催され、事業がスタートしました。当初は年度末までの限られた期間での実施だったため、厳しいスケジュールでしたが、全県的にアンケート調査を実施し、武術的身体表現を把握できたことは大きな成果だったと思います。棒術や「舞方（メーカタ）」、獅子舞など地域の多様な事例を記録できた点は意義深いと感じます。

八重山地方では、竹富島の調査票に「空手の型が含まれる」と記載がありましたが、棒術

や腕棒などの表記はあるものの、その具体的な演目構成の詳細が記載されていないなど、深掘りが不十分でした。また、宮古島では新里、野原、川満など南西部地域に興味深い棒術事例が確認されましたが、以前の新聞資料をみたら「保良ヨンレー」では青年会の男性が5人で踊るようなものがあり、その中に空手の型が入っているようです。

八重瀬町の富盛の十五夜でやる唐人行列とか大和人行列、女行列（ヨンシー）などがありますが、唐人行列の中で空手が披露されています。アンケートにもこのように書かれていますが、実際にどのようなことをやるのか書かれておらず、富盛の字誌を見ても細かいところまでわかりませんでした。このように、空手が披露されていることはわかっている、細かい内容まで調べられていないものもありました。こうした取りこぼしを防ぐためにも、今後は継続的な調査や情報収集が必要だと感じています。

アンケート調査の中でどこから伝わったとか習ったかというところで、石垣島の川平の結願祭は川平の字誌で見ると、500年前に仲間満慶山さんが独自に編み出したとなっています。与那国の方から伝えた棒もあつたりとか、本島から三人棒は伝えたとかいろいろあります。変遷自体はいろいろありますが、このような伝承のように与那国や沖縄本島から入り込んできている面もあります。宮良と白保は沖縄本島から来た空手家が棒を教えたとか、白保は勝連出身の人が「カッチン棒」を教えたとかの伝承があります。西表島の古見や小浜島は石垣島の川平から伝わったとアンケートで出ていて、与那国島では首里の空手家が1705年頃に伝えたとかされています。大元でいうと沖縄本島、首里の王府の関係者かと思いますが、伝来的なものも調査できたかと思っています。

他にも、新川の南風ぬ島と波照間のムシャーマの中で、シーシンボウと呼ばれる棒と獅子舞が一緒になっているものですが、これは漂流民が伝えたとかされる棒術で、新川のものとは波照間のものは元々は似ていました。



神谷 武史
沖縄県立芸術大学
音楽学部音楽文化専攻
沖縄文化コース 講師

神谷（武）【座長】

伝承者についても、「首里から来たタンメー（老人）」といった実名ではなく、呼称で伝えられているものが多く見られました。

萩原

私は宮古地域を担当しましたが、いくつか特徴が見えてきました。最も大きな特徴として、伝承地が非常に少ないことが挙げられます。他の地域では多くの事例が確認されている中、宮古諸島では棒術に関して6か所のみで、その分布も宮古島の南西部に4か所、多良間に2か所と、分布として2か所のみでした。

また、内容も対照的でした。宮古島南西部の地域では、非常に短い棒（3尺またはそれ以下）を用い、集団で隊列を組んで演じる形態が一般的です。一方、多良間では6尺ほどの長い棒を使用し、2人が対面して打ち合う形式が主流です。この違いは棒の長さや使用法の系統として興味深い特徴です。

さらに、他の芸能との関係にも違いが見られます。宮古南西部の4か所では、棒術と女性の集団舞踊、男女が一緒に円陣になるクイチャーなどが組み合わさる形態が特徴的です。一方、多良間では狂言や組踊といった舞台芸能の後に棒術が登場する演目構成になっています。

宮古諸島の棒術には2つのグループが存在しているように見えます。ただし、これらがどこから伝わったのかという伝承はほとんど確認できませんでした。棒の名称や形態を手がかりになれば、伝来経路を推測することは可能かもしれないと感じています。

萩原

宮古地域は八重山とは異なり、伝承のルートをはっきりと分らない点が特徴的です。これは、今回の調査で浮き彫りになった課題の一つであり、次の調査や研究の問いとして発展させる余地があると思います。

神谷（智）

私は南部地域を担当しましたが、調査の中で感じたこととして、綱引きや豊年祭、また高安ではガンゴー祭など12年に一度行われる行事があり、それぞれの地域で特徴的な棒術が見られました。例えば、棒を打ち合う形態が見られない地域もあれば、実際に激しい打ち合いを伴う地域もあり、多様性があることが分かりました。

地域ごとに棒術自体やその技術を持つ人々への評価が異なることも興味深い点でした。「あの人が上手い」「あの技が一番だ」など、地域ごとに独自の評価基準や視点が存在し、それが世代間の関係性や地域の結束に寄与しているように感じました。この点は、棒術が単なる芸能や武術にとどまらず、ムラ社会における重要な役割を果たしていることを示しています。

久万田

中部には「舞方（メーカタ）」と呼ばれる即興的な空手の型を演じるものが存在します。これらは旧北谷村や旧与那城村（現在のうるま市）などに見られ、非常に興味深い伝承です。

綱引きの時に棒をやるところが多いのですが、棒そのものをやるのではなく、年中行事のなかで綱引きの際に棒をやったり、中には読谷村のように、必ずしも綱引きではなくて、お盆のウークイや八月十五夜の観月会、青年合同祝いなど、さまざまな場面で棒を使った演目が行われています。棒そのものを書くのか、どのような年中行事との関わりがあるのかという視点も重要だと考えます。綱引きに関連して行うところが多いと思いますが、綱引き以外の年中行事にも注意を払

わないといけないと思います。

即興的な空手の型の披露については旧北谷村あたりの中部では「舞方（メーカタ）」と言いますが、南部では「舞方（メーカタ）」というのは、かぎやで風の上で棒の型を演ずるようなものになっていますので、同じ用語だけれども地域によって意味が違うこともあります。

技術的な身体動作に関する記述では、多くの報告書が「棒」に関する内容に重点を置いているように思います。私自身も最初は棒を中心にまとめようと考えていましたが、実際には棒以外の要素も多く見受けられました。例えば、三尺棒、六尺棒で対になってやるようなものもあるし、3～4人で行うフォーメーション形式のものや、渦巻き状に多数の人が動く「棒巻き」と呼ばれる型など、棒の使い方にも多様性があると感じました。

神谷（武）【座長】

沖縄のムラ行事との比較において、日本各地の武術的身体表現を伴う民俗芸能はいかがでしょうか。

久保田 裕道
東京文化財研究所
無形文化遺産部
無形民俗文化財研究室長



久保田

日本全体の武術的身体表現を伴う芸能は非常に幅広いのですが、棒を扱う芸能だけ見てもたくさんあります。ジャンルで言えば獅子舞、それから中世芸能の「王の舞」、これは天狗のような鼻高面をつけて、基本的には鉾を持ちますが、それがだんだん変化して、鼻高面が棒を扱う芸能は、祭礼の先導役を含めれば、全国各地にあります。それから、棒を振る風流踊があり、さらに田楽系。これは仏教の正月行事である修正会とも結びついていて、祝い棒などと呼ばれ

る呪術的な棒を使いますので、そういったものからの変化かなと思います。また神楽でも、特に修験道系のものでは棒を使った演目がたくさん存在しています。

いずれの民俗芸能でも、その武器の持つ魔を払うといった呪術性、祭りが始まる前に場を清めるといった祓いの要素などが共通しています。

一方、沖縄に関しても、こうした呪術的要素と競技的要素の双方が影響していると考えられます。例えば競技的な要素を持った棒踊りが、特に四国の高知県あたりと南九州にたくさんあり、これは沖縄と共通するのではないかと思います。九州では近世になって示現流の影響を受けたり、薩摩が武術を奨励して武術として高められていく面もあるようですが、現在は棒踊りという形でやっています。

もともと呪術的だったものに、近世以降武術的な要素が加わっていった、どんな風が変わったのか、そのあたりも見えていくとよいのではないかと思います。

九州や四国では、三尺棒とか鎌とか、尺八なんてものも使っているようですが、こうした道具を使った武術が踊りと結びついて、風流化していく。これがすべて武術と結びついていたのかについては、検証しなければいけないのですが。

それから、中には武術を演劇の中で披露することでお芝居的な要素として発展したものもあります。そうした要素を見ることで、呪術的なものと武術的なものを比較することで、沖縄の特徴の分析が一層明確になるのではないかと考えています。

さらに地域に棒が入り込んでいった、その地域の中であの人がうまいとか。そういう意識が地域の中でなんとなく共有されているのが、沖縄の特徴なのかなと思います。それが、民俗の中にどういう風に溶け込んでいるのか、民俗的な文化を見るにあたって、今回の調査はすごい資料になるのではないかと思います。



久万田 晋
沖縄県立芸術大学
芸術文化研究所 教授

久万田

沖縄の棒術には、綱引きの東西での競い合い、ガーエーの要素が強いという話になっていました。厄払いの要素が非常に強いと感じます。多くの行事では、何か行事を始める前に必ず悪霊を払うような儀式的要素が含まれており、こうした面にも注目する必要があると思ったのと、先ほどの「鎌踊り」みたいなものを考えてみると、沖縄本島にはあまりないんですけど、また、奄美大島の瀬戸内町の油井にある十五夜行事の「鎌を持って土俵で踊る」という例も思い出しました。これも土俵払い、つまり悪霊払いの一環として行われているように見えます。これを考えると、沖縄南部で行われるヘラで踊る「ウズンビーラ」や、農村部で金属製の農具を使って踊る行事にも、一種の悪霊払的な意味合いが含まれているのではないかと感じました。

神谷（武）【座長】

「舞方（メーカタ）」など座清めと言ったりします。

幕開けとしての役割を担っていると思います。

沖縄の棒術や行事が持つ多様な側面や、他地域との関係性について新たな視点が得られたように感じました。

さて、今回座談会に参加できなかった委員から寄せられたコメントを紹介します。

園原（事務局代読）

コロナ禍の影響で4年に一度行われる行事が8年ぶりに開催され、集落における伝統的な行事の継承に困難があったと感じられます。しかし、自身で調査した内容については、体系的な理解ができ、有益だったと感じています。

本島北部や離島でのフィールドワークも実施したかったが、時間の制約により実現できませんでした。北部、中部、南部、宮古や八重山それぞれの地域の特徴を踏まえ、棒術の所作や演武形態などを比較検証する視点があれば、より詳細で有意義な調査が可能だったと思います。

仲村（事務局代読）

ムラ行事で行われている棒術について、市町村史レベルでの記述には、棒術があるとされているものの、その発祥や伝承経路に関する資料的な裏付けがほとんどありません。また、棒の操作法に関する大まかな説明は見られるものの、具体的な所作や一連の操作についての文脈的な言及、または研究は軽薄であると感じます。いわゆる古武術、武具操作術との関連性や違いについての指摘もほとんど見受けられません。

さらに棒を含む支度や道具類の調達、制作に関する情報が不足しており、今回の調査は、これらの分野に今後アプローチするための基礎的調査と位置づけられると思います。芸能系武術は沖縄空手の裾野の広がり、言い換えれば生活への密着度を顕すことのできる好材料であり、この方面の研究は引き続き継続するべきです。

県にあっては、ユネスコへの沖縄空手の登録を目指した調査事業にこだわるのではなく、沖縄空手の全体像を把握するためにも必要な課題として認識していただきたいと思います。



【座談会テーマ②】

ムラ行事を継承していく上での 課題や対応策 又は希望について

神谷（武）【座長】

さて、これからは「村行事を継承していく上での課題や対応策、希望について」というタイトルのもと、議論を進めたいと思いますが、まずは座談会に参加できなかった委員から寄せられたコメントを紹介します。

田邊（事務局代読）

個々に事情がある中で継承について考えるため、普遍的な対応策を考えることは難しいと思います。ただ、パフォーマンスとしての側面を持つ実践に関しては、余興などにおいて登場した際の場の盛り上がり方は目を見張るものがありました。少なくとも、内地において民俗芸能が登場して多少盛り上がることはあっても、熱狂するということは滅多にありません。武術については尚更です。そうした、観る側も含めた熱狂（＝「情動的な繋がり」、もしくは「場のエージェンシー」のようなもの）のできるような下地が沖縄におけるムラ行事の持つ特徴に思えるので、ただ継承していくだけではそうした“豊かさ”は、なかなか維持できないのではないかと思います。

仲村（事務局代読）

空手普及の歴史を紐解けば、学校教育への導入が普及への大きな影響があったことがわかっています。「普及」は同時に「継承」とも読み替えが可能です。学校と学区地域との連携を取りながら地域芸能に触れ、運動会や学習発表会等の学校行事で演目として固定化できれば良いと思います。現状は問題意識のある職員が学

校に配置されていなければ、地域芸能系の演目は行われていません。教育現場と地域の連携が学習指導要領で示されて久しいですが、この連携について教育現場は、地域が抱える課題（この場合はムラ行事の継承）を踏まえたものとして、ともにその課題を解決する主体であるとの認識を持って欲しいと思っています。

園原（事務局代読）

本部町指定無形民俗文化財「満名棒（三人棒）」の事例のように、地域で行事の社会的な評価として文化財指定を行うことで、辛うじて型や演武の技術継承がされている事例があります。

県指定無形民俗文化財は現在 6 件のみで、主に本島北部に 5 件、中部 1 件しかないので、民俗文化財の価値を見出す必要があります。

とりわけ北部地区における集落行事は、過疎化により集落の構成員では成り立たない行事があり、消滅の危機にある行事があります。そのため早急な対策が求められます。

今回の調査で、集落によっては専門業者に撮影させ、しっかりと記録保存されている名護市数久田の事例があり、演武内容の詳細な確認やスーマキの動きを記録する上で再現性を確保されていることは大変有益でした。現時点の民俗行事のデジタルアーカイブとしての記録保存の有用性を確認することができました。

槍とティンペーの組型は、南部（八重瀬町東風平）や北部（本部町並里）と各地に点在して確認することができるので、古武術のひとつの型の伝播の状況を把握する上で興味深いと感じています。

久万田

継承の問題についてですが、単に文化財だから継承するというのではなく、「やる側の熱狂」が非常に重要だというご意見があります。すべての祭りに共通することですが、特に沖縄では戦後 80 年ほどの間で熱狂度が低下しているこ

とが明らかになっています。これは、若者を含む地域共同体への依存度が低下していることと関係があるのではないかと思います。

文化財として指定することで技術や行事の継承が保たれる場合もありますが、それは一部の意欲的な地域に限られるようです。

一方で、現在も行事が続いている地域は熱狂度が低下していても、地元の人々がその価値を認め、大切にしているからこそ存続しているのだと感じます。

神谷（武）【座長】

今の文化財指定が地域に良い影響を与えたという話を踏まえると、今回のユネスコ登録もその一環として重要な作業だと思います。最終的にユネスコに登録された場合、課題を抱える地域に対してどのような効果やメリットが期待できるでしょうか？

久万田

棒に関しては、八重山では非常に多様な型が存在していますよね。だからこそ、個別に文化財として指定する意義があると思います。例えば、六尺棒や槍、ティンペーなど、独自性のある型が文化財として評価されることで、その価値がさらに際立ち、文化財指定の効果があると思います。

文化財として指定されることで「なくなる」という安心感がありますが、課題はそこに「熱狂度」をどう取り戻すかだと思います。

神谷（武）【座長】

そうなんです。演じる側としては観客に目的や価値を感じてもらえることが一番の励みになります。それがあると、やっている子たちのモチベーションも持続します。

しかし、「継承しなければならない」と押し付けられる形で、「これを覚えろ」と強要されるの

は逆効果です。

久万田

私たちの友人と居酒屋で盛り上がるとホウキを持ってきて、棒の型を披露したりしていました。

盛り上がると自然にやりたくなる、そんな感覚があるんですね。

萩尾 俊章
沖縄民俗学会 会長



萩尾

文化財指定については地域ごとに大きな違いがあります。

竹富町では民謡を曲ごとに細かく指定しており、行事とか祭り全体ではなく、個別でやっています。西原の「翁長のヨンシー」という行事では、綱を引くのではなく、子供たちが担いで集落の主な拝所を回るという独特な形式を持っています。数年前に指定を進めていましたが、自治会の反対や子供たちの参加率低下が理由で、途中で取り下げることになりました。今年も公民館が放送で呼びかけたものの、子供が集まらず、大人たちが代わりに行う形になったそうです。

こうした状況を考えると、継承には子供や若い人たちの参加が不可欠です。ただ熱意だけではなく、参加しやすい環境を整えたり、地域全体で魅力を作り出す仕組みが必要だと思います。

宜野湾区のエイサーについても話を伺いましたが、以前はメンバーが 50 ～ 60 名いたのが現在では 20 名ほどに減少しているとのこと。練習の時間が遅くなるため、高校生までしか参加できない中、他の区から興味を持って参加する子供もいるそうです。友達に誘われて来る子供もいるので、こうした関心を持つ子供たちが増えるような仕掛け作りが重要だと感じます。

都市部でさえ参加者の確保が難しい現状を考えると、離島や過疎地域ではさらに厳しい状況が予想されます。特に子供の数自体が少ない地域では、地域行事の継承に向けてより積極的な支援や取り組みが求められるのではないのでしょうか。

久万田

子供を巻き込むという観点から見ると、読谷では棒が非常に盛んで、子供から大人、壮年まで一貫して続けられています。子供たちは、自分のお父さんやお兄さんたちが激しい棒を披露する姿に憧れを抱き、徐々にその技術を身につけていきます。小学生の頃はゆるやかに始めますが、ペアを組むことで一生続ける関係が築かれていくそうです。

神谷（武）【座長】

仲村委員から出た「学校現場に地域の伝統を導入してはどうか」という意見がありました。

家庭の環境や事情で地域行事や子ども会に参加できない子どもたちでも、一緒に地域の芸能や行事に触れる機会を学校現場で導入することについて、皆さんはどうお考えでしょうか？

久万田

学校で地域文化を取り入れるには、学校の先生が地域の文化に理解を持っていることが重要です。そうすれば、学校での実施が可能になります。教育委員会や市町村の学校教育課が主導となって、小学校全体で一体となって取り組むことが重要だと思います。

久保田

学校の先生たちもそのことについてはあまり知らないですね、地域の伝統や芸能について。まず、先生方に知っていただくことが重要ですね。

神谷（武）

園原委員からもお話がありましたが、地域ごとに映像や記録を持っているところと持っていないところがあり、記録事業の実施状況は様々です。ですが、今後、元気なうちに長老たちの知識を記録として残していくことの重要性を感じています。

萩原 左人氏
琉球大学 国際地域創造学部
地域文化科学プログラム
教授



萩原

宮古では学校ではなく、保存会が組織されており、その中で小学生を取り込みながら活動が行われています。具体的には、成人のメンバーが中心となり、練習に参加させるなどの取り組みがなされています。しかし、残念ながら人数は減少している状況です。こうした活動を映像や他の方法で記録しておけば、有効に活用できるのではないかと思います。

久万田

趣味で撮影されたものと、専門の業者が補助金を使って撮影したものの差があります。業者が撮ったものでは、顔がアップになりすぎて、全体像が映っていないことが多いです。例えば、地元の人に見せるために顔をズームしてしまい、踊りや棒術などの全体像が映されていません。後で伝承のためにその映像を使おうとしても、全体像が映っていなければ使いにくいですね。

久保田

毎年何本ずつか、記録作成を行っているところもあります。例えば静岡県とか千葉県とか、いろいろな県でそうした取り組みが行われてきましたが、結局、お金はかかるため、継続的に続けることは難しい現状があります。佐賀県のよう

にテレビやインターネットで発信している例も、参考になるのではないかと思います。

しかし、予算と時間をかけて映像制作すれば質の高いものが作れる一方で、作ることのできる数は限られるので、1本撮影している間に、他の多くのものが失われていくことも事実です。

ただ、今の時代誰でもスマホなどで簡単に映像が撮れるようになりました。ですので、そのような映像記録を集めてアーカイブするためのネットワークを作ることも重要ではないか、ということを感じています。

神谷（智）

取りまとめのセンターのようなものがあつた方が良いという点には賛成です。

久万田

デジタルアーカイブを構築することは、武術的身体的な動作に関する記録だけでなく、今回のような取り組みにおいても非常に重要だと思います。

神谷（武）

座談会もそろそろ終了の時間となりました。

やはり生活との密接な関わりがあることが非常に大切だと感じました。お疲れ様でした。

